

紅花に関する調査研究

第1報 山形県における栽培の沿革

佐藤 晨一・結城 勇助

(山形県農試)

1 ま え が き

最近ここ数年の間、紅花の作付が増えてきたことに伴い、その研究も急がれている。そこで、いままでの栽培沿革を知り、また、既往の文献について調査し、今後の研究方向にふれる。

本県において古い歴史をもつ紅花について、栽培を中心にその歴史を調べ紅花に対する理解を深め、研究の資とする。

1 原産 エジプト

2 日本への伝来 エジプト→アッシリア(BC 2500～AC 612)→ペルシャ→中央アジア→中国(漢の時代)→日本(応神天皇AC 208年～のころ日本に入り、3世紀末になって近畿地方で栄えた)。

3 最上紅花の発展

奈良(700年代)、平安(800～1100年代)に至って朝臣官人にもてはやされた紅花は、室町時代になってようやく山形県に入ったとされている。江戸時代において、山形の紅花は最上紅花として大いに発展する訳であるが、当時藍茜、紫根とともに代表的な染料植物として京染めなどに使われていた。製法は徳川家康の侍医呂一貫が伝えたとされており、その美しさを競いその華やかさは元禄(1680～)から文化、文政期(～1829)にかけての風俗にマッチし、最も隆盛をきわめた。

おもな栽培地は、相模、出羽、羽前、羽後、上総、筑後、薩摩、伊賀、陸奥地方であり、このうち出羽、筑後、薩摩は江戸時代に入ってから勃興したものである。このころの最上紅花は、第1図で示す山形県の郡名(10世紀ころ)で言えば、最上、置賜(今でも置賜地方という)地方に産し、最上地方がより多くの産額があり、全国にその名声を博した。

それも酸性を帯びた肥沃な土地で、開花期には適当な雨があり、また、朝霧のかかる場所という自然条件は山形県のような盆地、扇状地に合致したからであり、それが良質の紅花を産することになったものと思われる。



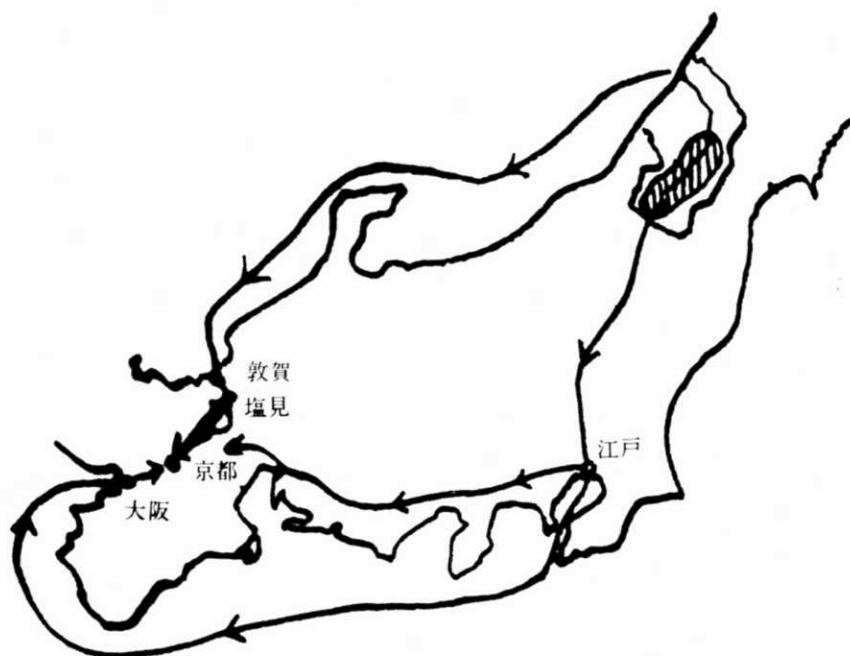
第1図 10世紀ころの山形県の郡名

ところで、最上紅花の産額はどれほどで、それがどのように発展、変化してきたのだろうか。それを示す最も古い記録では、寛文8年(1668年)の記録で、山形藩の課役の対象となった移出額は450～460駄(1駄32貫目、約54,000キロ)であり、この産額は元禄ごろもほとんど変わらなかったが、享保(1716～)の終りごろからしだいに増加し、宝暦のころ(1751～)には、1,000駄(120,000キロ)を突破するようになった。

その後、宝暦、天明、寛政にかけ1,400駄(16万キロ)に、幕末の文化、文久ごろには、第1図の最上川を舟下りしての中継地である大石田に集まった紅花は1,550駄にも達した(第1表参照)。第2図は、当時の最上紅花の京都への移出経路を示したもの

第1表 最上紅花の生産額の発展

	村全 山産 地方額	酒田、 大石田、 着	備 (谷地 考産)
寛文7年 (1667)	駄	駄 450~	駄
享保10年 (1725)	400		40
〃 20年	670		120
宝暦5年 (1755)		1,200	350
〃 10年	560		
明治3年 (1766)	1,000		
〃 5年		950	
寛政12年 (1800)	1,400		
文化8年 (1811)	600		
文久ごろ		1,550	



第2図 最上紅花荷送図

である。

しかし、紅花栽培は、豊凶の差がはなはだしく、日照や多雨で半作にも達しないときがたびたびあり近世後期の記録によれば、10カ年平均は1,000駄あまりであったという。

ところで、最上紅花の全国における産額の割合をみると、1つの例として、京都府下の紅商組合が、京都に移入される1カ年の総産額約2,400駄のうち、最上紅花は約1,200駄であると報告されているのがあげられる。

次に栽培面積からみると、正確なものはわかっていないが今田信一氏の研究によれば、1,000駄を生産するには、約1,800町歩が必要になると推定されている(この計算では10a当り15Kg乾花が取られたことになる)。

そして、県全体の畑面積に紅花畑の占める率は、2.3~3.2%であると推定している(当時の最上地方だけでは3.9~5.5%)。各村における栽培状況を調べると、村でも産額の多いところの仁田村(今の寒河江市)では、畑地52町6反のうち15町6反が紅花畑という高い率を示し、また、今の山形市にあたる谷柏村では、7町7反のうち3町6反と半分も紅花畑で

占めていた。これらの村々での紅花作付割合は、平均すると20~40%となる。

1戸当りの作付面積はどのくらいになっているのだろうか。仁田村の例で1反6畝、畑谷村(山野辺町)で5畝歩あまりになる。

収益性をみると、紅花による収入は畑地収入の44%を、また、米を含めた全体収入の34.6%であり、かなりのウェイトを紅花によせており、元禄ごろで1駄が30~40両で米の75~100俵分にあたり、紅花1反歩が稲作3反歩に匹敵したということである。

しかし、農民がこのような収益を紅花からあげられるのは農民がみずから干花加工を行なった場合であったようである(現在でも同じ)。農村内部で干花生産を行なっている記録は、享保ごろからみられるが、これが一般的となるのは明和、安永期(1764~'80)であり、それまでは山形の城下町など、町方の問屋や目早く仲買人)によっておもに行なわれていたものである。

4 最上紅花の衰微

紅花産額減退の徴候は、天保年間(1829~)薩藩の支那紅花輸入により現われたが、明治政府の貿易の振興によって、すなわち、中国の四川省を中心とし

た東南アジアの生産地から安価な紅花が大量に輸入されたために急激に生産は衰えた(第2表参照)。やがて、化学染料アンリンがドイツから輸入されると、日

本の紅花の栽培は、ほとんどみられなくなる。

第2表で明治13年以降輸入量が減ったのは、アンリンの影響を示すものである。

第2表 明治年間紅花輸入量年比較

年 度	明治 元年	明治 2年	〃 3年	〃 4年	〃 5年	〃 6年	〃 7年	〃 8年	〃 9年	〃 10年
量(千キロ)	51	93	14	168	207	113	270	391	292	280
年 度	明治 11年	〃 12年	〃 13年	〃 14年	〃 15年	〃 16年	〃 17年	〃 18年		
量(千キロ)	265	259	207	136	146	86	74	60		

山形県においても減産の道をたどるが、それでも明治7年の県産総量は、400駄(47,000キロ)前後は出荷していた。しかし、翌年には、200駄と半減し、やがて統計書から姿を消すこととなる。明治19年県は農商務省に対して紅花復興の可能性について質問書を提出したが、すでに紅花は栽培や摘花法、製法、販路など忘れられていた。

一方、県農試においては明治38年から40年にかけて栽培や種子新古試験、摘心試験などを行っている。当時の耕種概要を示すと、は種量5.4Kg/10a、畦幅60cm、条幅21cm、は種期4月上中旬、間引2回、中耕4回、施肥は、人ふん尿、油粕、重過石、木灰などを用い成分にして、10a当りN 4.8Kg、P₂O₅ 6.8Kg、K₂O 4.8Kgとなる。品種は、アザミボタン、オオシメボタン、コシメボタンなどが用いられた。

5 最近の紅花の動向

全く忘れられていた紅花は、昭和も25年ごろより、化粧品など需要の道が開け、少しずつ栽培されるようになってきた。

その経過をたどってみると次のようになる。

昭和25年 衰微の状況に心を痛めた紅花愛好者有志が「山形紅花振興会」を組織する(山形市、寒河江市、河北町谷地)昭和29年、山形市志村に「出羽村紅花栽培組合」が誕生する。化粧品本舗と取引される。やがて県園芸特産課でも紅花の有利性に着目し、その振

興策をたてる。

同年2月、NHKを母体に県内植物愛好者などによる県花選定運動が起こり、30年に紅花を県花と定める。

昭和40年、県紅花生産組合連合会(山形市、高島町、川西町、米沢市)を組織する。この時より契約栽培が始まる(資生堂、猪俣産業等)。昭和42年、同会に村山市、遊佐町が加入。県農試でも本格的に試験に取り組み、第3表に示す面積や反収になる(試験内容は第2報)。

第3表 紅花面積と反収の推移

年 次	栽培面積 ha	反 収 ha	価格(Kg当り)
昭和40年	3.4	5.4	
〃 41 〃	6.7	5.0	
〃 42 〃	9.5	4.7	
〃 43 〃	9.2	4.5	1等品 7,300円 2 〃 5,840 〃
〃 44 〃	9.3	8.5	1 〃 7,700 〃 2 〃 6,160 〃
〃 45 〃	16.1	8.8	1 〃 8,050 〃 2 〃 6,440 〃
〃 46 〃	36.0	—	〃

最後に油料作物としての紅花を取りあげてみる。

紅花の子実は、家畜の飼料として、また、食用油や石けんの原料として、アメリカ合衆国において1950年ころで40,000ha 前後栽培されている。その後、用途は塗料原料の乾性油に使われるなど、発展の可能性のあるものと思われる。

県における子実の用途は、食用あるいは薬用としてであり、取引数量も7～8tと少ない状況である。現在、日本でアメリカ、メキシコ、中国などから輸入している紅花子実は、昭和42年で12万tである。

参 考 文 献

- 1) 山形県 山形県史(農業編中)昭和44年
- 2) 菅田慶恩・横山昭男. 山形県の歴史
- 3) 羽陽文化第18号 昭和28年 山形県文化財保護協会
- 4) 朝日新聞「よみがえる紅花」 昭和44年
11月1日～16日
- 5) 油糧作物統計 農林省経済局編
- 6) 農事試験成績(第13～16報) 明治42年